

道元禪師の禪思想と祈り

佐藤悦成

(愛知学院大学)

はじめに

道元禪師（以下、敬称略）が自らの仏法を確立してゆく過程において、その主張は『正法眼蔵』などに著わされ、学人化導の垂示は門弟子の記録によって『永平広録』ほかの語録となった。

例えば、道元は会下の学人に、「身の威儀を改むれば、心も随って転ずるなり」と説くとともに、また云く、得道の事は心をもて得るか、身を以て得るか。（中略）今我が家は、身心俱に得るなり。その中に、心をもて仏法を計校する間は、万劫千生にも得べからず。心を放下して、知見解会を捨つる時、得るなり。見色明心、聞声悟道のごときも、なほ身を得るなり。

然れば、心の念慮知見を一向すてて、只管打坐すれば、今少し道は親しみ得るなり。然れば道を得る事は、正しく身を以て得るなり。是れによりて坐を専らにすべしと覚ゆるなり。

とも開示している。

道元にとって身を整えることは、そのまま心も整うことであり、仏道を得るとは、身心をもって受領することであ

った。身の実在を視野から外した知としての仏道は、自らが習得した論理性の範囲の中でしか存在し得ないものであり、香巖智閑が師の瀉山靈祐に問いつめられて答えを見出せなかった立場とかわるものではない。

香巖はその後、一切の念慮知見を捨てたからこそ、石が竹を撃つ音を聞くことができたのではないかと道元は説く。知の領域で仏法を了得することが不可能である限り、身に思想を収束させるしか残された方法はない。

『正法眼蔵』『現成公案』巻には、

仏道をならふというは、自己をならふなり。自己をならふというは、自己をわするるなり、自己をわするるといふは、万法に証せらるるなり、万法に証せらるるといふは、自己の身心、および他己の身心をして脱落せしむるなり。

とある。ここでは、自己ということばが、身心の語を経由して脱落へと展開してゆく。

個としての全人格を指し示す「自己」ということばは曖昧であり、存在としての自身と仏法の関係に言及する場面においては不十分なことばとして、道元は身心から身へと概念を巧みに動かしてゆく。このことばの移行は、道元の思想が現実の上に成立していることを表明するとともに、「脱落」へと転じる必須の過程であったということができる。

天童山における師如浄の指導により確立された道元の大事了畢を象徴することばが「身心脱落」である。「只管打坐」を標榜し、段階的に「悟」という目的に迫らんとする手法を採らない道元にとって、精神と身体を結びつけるものが坐禅であり、日常生活の全体であった。それ故、「仏行」ということばの解釈を広げ、一挙手一投足に修行としての意義を持たせたのである。

その意味で、「身心脱落」の語は、精神の位置まで身体の存在性を引き上げんとした道元にふさわしいといわねばならない。このことは、「洗面」「洗淨」の両巻を設け、その中に『華嚴經』『淨行品』からの偈頌を引用することと無縁ではない。

そのような道元の仏法観は、原体験の表現として「身心脱落」に表わされ、門下への説示として「眼横鼻直」として披瀝される。

身体と心を分離して二元的に捉えることのない道元にとって、坐禅は単なる「悟」に至る手段ではなく、身心が一元化する「時」であり「場」となる。身と心が仏法に沿って一体に動くことは、自己の完全なる成就であり、一元化以前に起こり得る身と心の不安定な揺動は払拭され、何ものに対しても身心の均衡を失わない自己が完成するのである。

それ故、「眼横鼻直」を記す『永平広録』の上堂では、「不被人瞞」とも記すのである。「或從知識」により、また、「或從経卷」によって自己の真源へ回帰する試みを継続するところに「行」としての意義が存在するなら、「眼横鼻直」を認得し了った自己は、完結し得た存在として積尊と並立することとなり、もはや他者からのいかなる影響を被ることもない。過去には目的ともしていた「悟」も、修行の過程における師の方便も、修行の結果としての師の印可も、自らが自己の真源を見出した以上、「瞞」となる。それは、自身においてすべて了畢した者のみがいい得ることである。

師を含めて他者より「眼横鼻直」を教示されるなら、それは「瞞」にはかならず、自身で認得するゆえ「瞞ぜられず」といえる。それは以下に記す上堂により明らかである。

道元は、同じく『永平広録』巻二「大仏寺語録」末尾の、「天童和尚忌上堂」において、

莫謂、先師瞞弟子、天童却被道元瞞。

と述べていることから、先の「瞞」の意味するところが明確となる。この立場を表明することが師恩に報ずることになる故、道元は先師の忌日上堂に再度「瞞」の語を用いているのである。

このような出発点を持つ道元の仏法は、その後の展開により様々な形容を与えられる。

道元の用いたことばを基として「威儀即仏法」「作法是宗旨」などの語が生まれ、いずれも語句の持つ概念から、その著述に触れたことのない者にも綿密にして厳格な宗風を想起させるに充分である。

道元一代の行実からも、京を離れて越前に居を移すなどは、当時の僧侶とは逆の徑を往くものであり、時代と交わることのない精神の高矩を示した例といつてよい。

しかし、深山幽谷の境に赴いたことが隠遁を意味するものでないことは、志比庄に叢林を開いたことに示されている。この点は、道元が隠遁者と一線を画し、正法の興隆を求め、学人の育成を希って越前の地を選んだことを現わしている。

換言するなら、自己の身体を置く空間、精神を機能させる時を失ない、逃避として山間に坐す者達とは道元思想が本質的に異っていることを示している。

過去において道元は隠遁も仏法の一形態と捉え、空阿弥陀に代表される当時の遁世者に心を寄せる時代のあったことが『正法眼蔵随聞記』に記されている。

山間に閑居して自己を律し、淨行の修道者として過ごすことへのあこがれが心に芽生えたこともあったであろう。

しかし、遁世は仏法としての真価を自ら捨て去った者の自己満足に過ぎない。出世の仏法が師から法嗣へと受け継がれ、それが俗世において化導救済として機能する点にこそ仏法の本質があるならば、遁世は現実逃避であり、仏法の形骸といわねはならない。

遁世者を「浄行の菩薩」と尊崇する世俗の人々の視点は誤っていることを、道元は門下の学人に繰り返し教示している。勿論、浄行そのものに過誤があるのではない。浄行を目的と誤り、また、浄行を手段と捉えて、その意義を理解しない者達にこそ過失があるのである。

經典は浄行として項目を挙げてはいるが、修道過程においてそれらはすべて我が身に備わってくるものであり、意を用いて行う「行」ではないと道元はいう。

このような垂示が行なわれる背景には、道元自身が遁世に悩み、それを解決してきた事実裏付けられているからであり、またそれ故、遁世の虚偽を指弾し得るのである。

右のごとき道元の仏法は、従来の我が国では眼を向ける者のなかった日常的行為に宗教的意義を与え、そのために食事・排泄・睡眠にまで言及する。その論理展開の端緒として引用したのが「浄行品」であり、自身調伏への願いであった。

一 『正法眼蔵』「洗浄」巻

この巻の奥書には、

爾時延応元年己亥冬十月二十三日在雍州宇治県観音導利院興聖宝林寺示衆

道元禅師の禅思想と析り（佐藤悦成）

と記されることから、道元が『正法眼蔵』として大衆に示し始めて五番目の垂示ということができる。

初期教団における道元の説示記録である「随聞記」から當時を推測すれば、僧堂に起居する学人は僅かであるものの、懷奘を首座に任じて秉弘を行なわせるなど、叢林としての形態を整えつつあった時代である。

修行とは僧堂における坐禅のみではなく、日常のすべてが修行であることを、師からの説示だけではなく、学人自身が自らの経験を通して理解し、また、体現しなくては道元のめざす叢林とはいえないことから、本巻の冒頭に、「作法これ宗旨なり、得道これ作法なり」と示して、瑣末な行為も「仏行」であることを知らねばならないと示すのである。

生きている自己を自から認識する時、「食べる」行為の対極にある「排泄」行為をあまりにも軽んじているのではないであろうかと道元は考える。修行のため我が身を保つ「食」行為の価値が「浄」であるならば、大小便の排泄は「汚」であり「穢」と捉えて遠ざけようとするのは世俗の価値観であり、出家者の道ではないというのが道元の想いであったといえる。自身の生命活動に浄・穢の相対を持ちこむことは、自らの内に両極の行為が内包されていることを自分で認めることとなり、「仏」としての存在を自ら否定することになるというのが道元の立場であったともいえる。

道元は南嶽懷讓と六祖慧能に「不染汚」を語らせ、仏々祖々が護持してきた修証は身心が汚れていないことを証すことにあると記す。現実の染汚と思想の染汚が同一の視点で語られ、「仏果にいたりてなお退せず、廃せざるなり」と記すことで、法の清浄が身心の清浄にまで拡大され、仏法と身心が等価値の認識のもとに行が継続されてこそ、「作法これ宗旨なり」といい得ると道元は示す。その視点では、大小便を洗うこと、指の爪を短くすることの意義

を理解できてから、行を実践するのでは遅いのである。意義が何処にあるのか不明のままでもよいから、手本の通り行なうことを道元は望んでいる。

すべてを「仏行」として「履行」することで身心の清浄は成就すると道元はみるゆえに、「身かならずしも本浄にあらず、本不浄にあらず。諸法またかくのごとし」と記すのである。我が身が本来的・根源的に清浄だということは固定概念の束縛であり、そのような見解に同調することはできない。逆に、現実の自己に束縛されて、自身を不浄と決めつけることも必要ではない。なぜなら、自身をどのように修めるかは、自ら決めて行じることでは現成しないからであると道元は述べ、それは、誰しもが浄を疑うことのない「諸法」も同じであるともいう。

法は我々の眼前に現成しており、何も蔵されてはいない。しかし、それを観る者、観ざる者があり、行ずる者、行ぜざる者のあることを考えれば、すべてを本来不変と断じることとはできないし、それが仏教の考え方の基盤であるとするのである。

「或從知識」といい、「或從經卷」とする「從」の語は、道元がここに記す「作法これ宗旨」を構成する柱ともいえる。見たまま、教えられたままの形を自身において実行する時、その行為を思想が支えていることを体解できると道元はいうのである。

その理解を促すため「浄行品」の一節を引用し、自説が妄説にあらざることを示して実践への糸口を与えんと試みるのである。

華嚴経浄行品云、左右便利、当願衆生、控除穢汚、無婬怒癡。……

大小便をするにあたって、衆生は穢れ・汚れを除くとともに、婬（貪）・怒（瞋）・癡の三毒をも除くことを願うべ

きである、と記す偈文を引用する。

右は、出家受戒者の「盥洗」の願（七願）三番目として「浄行品」に記される。

次いで道元は、師如浄のことばを記して、身心を浄ならしめるとは、長髪長爪をいましめることだと示す。髪を剃り、爪を剪ることが仏法了畢の道だとするのであるが、ここにも「作法これ宗旨なり」とする道元の仏法観が記され、僧形に仏法の具現を主張している。

道元はいかなる場合においても異形の僧を認めることがない。世間においては、悟入の後は、長髪長爪の姿で世俗の人と何ら変わることのない外見であろうとも、それは悟りの境界に影響するものではないとされ、僧としての形式に執著しないその行動が評価を得ることもある。しかし、道元はそのような欺瞞を決して許すことなく、それは未悟の証しであり、奇をてらって虚名を得んとする醜惡な姿であり、唾棄すべき所行であるとする。

大事を了畢し得た者にとって、浄髪して円頂となす形式に何ら執著するものでないのは当然である。しかし、得悟の境界においては、僧としての清浄な姿以外に自らの身を置くことはなく、奇をてらう異形に思いが及ぶことは決してないのである。

思考の範囲にないということは、意志の力で行なわないという遮情の側に自己が在るのではなく、すべてに自由であり、自在に振る舞っても、思考・行動が長髪長爪の方向に向くことがない表徳の側に居ることである。

「洗浄」巻末尾に、

これら（規範、規矩を指す）をあきらめざらんよりさきは、寺院を草創し、仏法を修行せん、あやまりおほく、仏威儀そなわらず、仏菩提いまだ現前せざらん。

と記し、廁の用法、大小便利の作法が仏の威儀であり、それが備わらない限り仏道は成就しないと説くところに、道元の身体と精神の交わる点がある。

二 『正法眼藏』「洗面」巻

この巻は、奥書に記される限り三度大衆に示されている。初回は先に記した「洗淨」巻と同日の延応元年十月二十三日に興聖寺での示衆であり、二回目は寛元元年（一二四三）十月二十日に越前吉峰寺で行なわれ、三回目は建長二年正月十日に永平寺でのことである。三度の示衆は異例のことであり、道元がこの巻に込めた想いの強さが伝わってくる。しかも、三度目は示寂の三年前であり、最後まで推敲を重ねていたことが判明する。

冒頭に『華嚴經』『安樂行品』を引用した上で道元は、「内外俱淨なるとき、依報正報清淨なり」と記し、澡沐は単に身表を清淨になすのみでなく、それは仏祖の修証であり、淨の超越、不淨の透脱、非淨非不淨の脱落に至る功德であるという。

自己の内面（心）外面（身体）がともに清淨である時、この身心をとり巻くすべても清淨になるという。それ故、道元は沐浴の作法に続いて洗面の作法を記し、続いて歯を磨き、舌を刮ることにまで言及する。

つぎに楊枝をつかふべし。今、大宋国諸山には、嚼楊枝の法、ひさしくすたれてつたはれざれば、嚼楊枝のところなしといへども、今、吉祥山永平寺、嚼楊枝のところあり。

と記し、『華嚴經』『淨行品』の偈文を引く。

手執楊枝 当願衆生 心得正法 自然清淨

道元禪師の禪思想と祈り（佐藤悦成）

晨嚼楊枝 当願衆生 得調伏牙 噉諸煩惱

右の二願は、「洗淨」巻に引用した「淨行品」の願文と同じく、「盥洗」の願の一・二願である。

道元は「盥洗」の七願すべてを「洗淨」「洗面」の両巻に引いて、学人に仏行としての所作を教示するのであるが、「淨行品」が学仏道の基本的作法を記すことに止まるのに対し、道元はその作法を思想に昇華させ、規矩の遵守が仏法の興隆と直接に結び付くとまでいい切る。

それ故、入宋した時に味わった失望感を「洗面」巻に隠さず記している。

嘉定十六年（貞応二年、一二二三）、癸四月のなかに、はじめて大宋に諸山諸寺をみるに、僧侶の楊枝しれるなく、朝野の貴賤おなじくしらず。僧家すべてしらざるゆえに、もし楊枝の法を問著すれば、失色して度を失す。あはれむべし、白法の失墜せることを。

道元は大宋に正法を求めて渡って行く。明全という先達を得ることで、入宋は現実となり、期待を胸に秘めて寧波に着いたのである。渡航にあたっては明全がその手続きの面倒をみたのであろう。榮西の入宋に関与した人々の縁故をたよったと思われる。

道元は、寧波到着後も暫く船中に留まらざるを得なかったものの、阿育王寺の典座と問答を交すことで大宋の仏法の片鱗に触れ、予想と違わぬ大陸の仏法に喜ぶ一方で、失望も味わっている。

生命を賭して海を渡り、文化の中心に足を踏み入れたのである。そこでは無名の典座さえ、日本では誰も教えてくれなかった仏法の枢要をあたりまえに身に付けている。大寺の大徳といわれる人々は、仏法について充分に理解し、問えば堂々とした論理を展開する。

しかし、その口は臭いのである。二、三尺を隔てて対話しても口臭が耐え難いのである。日本人なら誰でも知っている楊枝を使うことを、文化の国の僧俗が知らないのである。この失望がいかに大きかったかが、先に引用した「あはれむべし、白法の失墜せることを」の一句に示されている。

道元にとって口臭の有無は、生活習慣の問題に止まらず、「仏法の衰退」として思考されている。人としての生理が仏法と直接に結び付いている点に、道元の思想の特質がある。

いまわれら、露命を万里の蒼波にをします、異域の山川をわたりしのぎて、道をとぶらふとすれども、澆運かなしむべし、いくばくの白法か、さきだちて滅没しぬらん。

この一節に、道元の悲憤が込められている。このようなことを体験するために入宋したのではないと道元の身心が苦痛に満ちている。道元にとって楊枝は、「出塵の器」であり、「清浄の調度」なのである。この楊枝を用いて刮舌する方法は柴西が日本に伝えたのであるという。柴西が入宋した時代には作法としての嚼楊枝が生きていたということであるなら、仏法の衰退は近年のことであり、今なら失なわれた作法を取り戻すことが可能ではないのか、少なくとも自分だけは仏の威儀を将来せんことを道元は希ったのである。

ひそかに観想すべし、後五百歳にうまれて、辺地遠島に処すれども、宿善くちずして古仏の威儀を正伝し、染汚せず、修証する、随喜歡喜すべし。

の一節はまさに道元の心境を如実に表しているといえよう。

結 語

入宋以前に道元が想い描いた内なる幻想としての仏法は、楊枝作法を知らない大宋の仏法と、叢林の食事を司る典座が示した正法との較差によって崩れ去ったといつてよい。道元は自らを見失なつたまま、内なる自己を再構築しなければならなかった。その彷徨は如浄との相見まで続くことになる。道元の正法への飢餓といつてよい状況は、如浄との出会いで救われる故、「洗淨」「洗面」巻を示衆する道元があるのである。そして、道元の示衆を聞く学人は、道元の思想と交わることができず、かつて入宋後呻吟した道元と同じく身と心をいかに結び付けるべきか迷うのである。道元は門人に、その呻吟、その不安を隠蔽するなど説き、「これ古仏の正法なり、道心弁道のともがら、修証すべきなり」と老婆心をもって示す。

身心の交わりこそが自己の本質を自ら諦らかにする唯一の方途であることを道元は自分の体験をもって学人に示し、ここに明らかな修証があると大衆の前に立つのである。

道元は「尽十方界真実人体」といい、「仏道の身心は艸木瓦礫なり、風雨水火なり」などのことばで自らの意図を明かさんと試みる。伝統的なことばで表せば「草木国土悉皆成仏」ともなろう。しかし、すべての存在が仏性を普遍的に有して、成仏しているのだというあたりまえの説明は道元において可能ではない。

道元にとって器世間の中にある有情としての自己が仏道を成就すれば、自己を存立させている周囲（器世間）も同時に成道すると主張し、そのためにはこの身心が交わることで整合し、不染汚の修証としてすべての行為が仏行とならねばならないと説く。表象的な「すべては本来的に成仏している」との解説など道元にとって何の意味も持たない

のである。

学人にとって外界たる器世間は、共通理解としてただひとつであるのに対し、内面における「自己の観る」器世間は学人各個人においてそれぞれに存在するのである。認識としての器世間は無限に存在するといわねばならないから、「悉皆成仏」とは観念ではなく、個々の内面における身心と器世間が交わった時初めて確認される自己の真実なのである。この交わりを体得しない者においては、このことは観念に終始し、空しく標語となるのみである。道元はそれを嫌悪し、認識の世界において各個人は別の存在であり、他は他の山河を観てそこに成仏し、衲は衲の山河を観てここに成仏するとした上で、これまで互いが別に観ていた山河は成仏によりはじめて同一となるのだと説く。

自己の身心に仏道の現成があり、その眼に映るすべての存在、衲をとり巻くすべての事象が真実なのである。道元はその点を「洗淨」「洗面」の両巻を記すことで明らかにしたといえる。『正法眼蔵』『発無上心』巻に記された、

明星出現時、我与大地有情同時成道。

の一節は、これまでに記した点を直裁に表している。

